



新入生諸君

學長
大西昭男



先ずは入学おめでとう。

諸君は今や大学生、しかも関西大学の学生です。念願の大学に入学することが叶い、その喜びに浸っている人に対しても、仕方なく関西大学に決めた、更には何となく大学という所に来てみたというような人をも含めて、新入生諸君の一人ひとりに向かつて、次のように申し上げたい。何れともあれ大学生になったということは、当たり前のようにみえて、それ自体なまなかのことではありません。それにもかかわらず、そのことのみでは大したことは言えないでしょう。かかる奇妙な言辭を運ねて、諸君を訝らせようと図っているわけではありません。大学生である、という事実そのものは、形式的には確かにその通りであり、諸君がそのことを公言するのに何の遠慮も不要。しかし、重要なことは実質的な意味で大学生であるということであり、そのことを言い得る人は今はまだないはず。それどころか、大学生になりつつある、とか、なろうとしている、とかいう正す、改めて考えてみれば、難しいこのように思います。従って、敢えて言えは、冒頭の「祝辞」も、自分自身がこの時に受け止める心構えありや否やと胸に問うてみるべきではないでしょうか。但し、たとえ自分の心の裏ではあっても、今すべ確かめる術もないであらうことを鑑み、とりあえずの祝辞であるとしておきたいのです。

大学生になつたものの今日、自らを顧みて、満足しておる人もおれば、不足を歎く人もいましよう。その満足も悔いも共に現時点における自身の貴重な財産ではあります。問題はそれを将来に向けて如何に活かし得るかにあり、今の満足と反省の延長線上のみに止まっていたのでは、自らの明日など築き得ないのだということ、先ず警告しておくべき義務を感じます。

真に大学生たんとする者は、必ずや自問すべき問題に達着しましょう。またそうあらねばなりませんまい。第二には、何の故に大学へとやって来て、何の為に学ぶのかという問い。思い付きであるなら誰もか答えられます。しかし、何事にも真摯たんとする程の人には、迷答するに逡巡、躊躇を感じて如き難問のはず。かかる人をこそ、むしろ本当の意味での大学生たんとする人、な
りつつある人と呼びたいのです。

第二は「何を学ぶのか」という問い。これは、既に学部・学科が決定している故にとか、自分は確固たる信念を抱いて学科を選んだのであり、その答えは自明であるからとかいう理由によって答える必要がないとするものではないのです。確かに所屬すべき所が決まっている以上、具体的に履修すべき科目は自ずと決まっています。しかし、それらの講義に出席し、何の疑いもないまま、暗られることを既にある事実・真理として、いわば、頂戴するだけで十全だと感じる人が、かえって大学の講義にあるいは不審を抱くかも知れません。先生が時にはどうおいつ自信なげに愚案するところにも出会うからです。しかし、学問とはそのような迷いに似たものであり、仮設に仮設を重ねつつ、真理へ向かわんとする過程こそ重要なのです。そこでは諸君自身も積極的に自主的にその真理探求に参加し得るのです。であればこそ、第三の問いは自然とみえてきます。「如何に学ぶか」です。単なる「正解」の鵜呑みや選択ではなく、自らが案出した方法で問題に取り組むこと、これでありませう。果敢な試行こそが大学では求められているのであり、時には錯誤すら許されるのも大学なのです。以上のなぜ、何を、如何にの三つの問いに対して、自分なりの自分独自の回答を見出すことが、この四年間の課題とも言えます。

ところで、小、中、高、更には予備校とひたすら勉強を続けてきた過程で、あるいはスポーツの練習を通じて、ある日ハッと眼を開いたような経験がありましょう。これは心理学上の用語で「飛躍」と言います。努力や訓練をいくら重ねても進歩できない高原（フラット）状態を脱しますと、突然飛躍的進歩が現われるのです。苦しい低迷、模索のあとにやがて来るいわば至福の瞬間です。ところが諸君は今や敢えて言えは「なまじ」大学生である。もはやあの受験勉強の一直線の道がなつかしくすら思える程に、今は前方が定かなくて、混沌としていることでしょう。そして、あの飛躍の至福は再び求めても得られぬもの、あるいは求めることもないものなのではないでしょうか。断じて否。今後は更なる飛躍を自ら求め、そのことによって苦しまねばならない。「求めるものは苦しむ」という「プアウスト」中の一句を思い浮かべつくく思ふのです。今までは違った次元の、より深い苦悩から、より高い飛躍へ向かって、一歩一歩自らの足を確かめ確かめ踏みしめていってほしいのです。諸君が今から受けようとする大学の教育、参加すべき大学の研究とはそのようなものなのです。

諸君はどうか、本当の大学生になつていただきたい。そして、そのことは、いつの日か自らを本当の人間として鍛え上げてゆくべき、厳しい、難しい課題であることを胸に刻んでおいてほしいと願つております。いささか苦言に類した励ましの言葉をもつて、
とりのあえずの祝辞とします。



四月は正に入學月であつて、どの學校でも入學式はやりである。本學でも入學式は毎年四月八日と決められている。当日の

新人生諸君の眼
は、苦しい受験勉強
強から解放された喜びで、これ
から始まうとする大学生活へ
の期待と不安が交錯して、嬉し
さの中にも緊張を隠し切れず
にいらる。しかし、それも二月
ち二月たつにつれて次第に大
学生生活に慣れてきて、そのや
る者の個性が現れてくる。▼
一方、大学では学生を二人前
の大人として扱い、細部にわた
りてまづ、とちかく言わない。
から、勉強をするか、しない
か、クラブ活動をするか、否
かな全ににおいて自主性が優
先される。学生への通知は、開
として掲げられて行われる。
その規定を盲従するか否かは、
これまた本人次第といつても
なる。従って大学は、ある意味
では、自主独立の精神を養う場
と考へよう。そこでは、先ず
第一に本人自身が積極的に努力
する事が要求される。これは
一見親切に見えろが、むしろ
本人を独立した成人に任せて
けるための訓練を解釈すればよ
い▼また大学では、演習や実
験の成績に影響を及ぼすこと
になる。小生の経験では、採
結果のクラス平均はほぼ中程
で、成績の分布が小・中・高
学校とは大分趣が違ふ。要す
るに平均点附近の人数が比較的
少なり、その前後、極言すべ
は、良でできる人と悪でな
人に大別される場合が多い。
れれも主性の現われの一つか
である。

[illegible]

「石位候」は昔語に「至明」「昭」に分し、番附を指して目録であるが、石油類でないものは炭素質の油類を除く。第四層の圖は、將來に於いては炭素質のハニヤシに特別先施するに調整せざるべきものである。

わが時は、高度發達が漸次低降に向つた今日、個體經濟の交換を要せず、其の富の累エルギヤの利用法の研究、大企業による計画的生産の代用、食糧の供給の公的代行、貨幣上の本國產と外國產の防に據りたる商部院の二元化、農林省の官給金の削減、労働者の経済的救済府院の促進等々本年より實踐中が問題であるもののタツが、資源の充分利用の場から、資源の濫利用の場へ移るのを恐れてゐる熱心な読者歡迎である。

(清学教授)

キャンパス情報

の概括的

学生部にどしどし相談を

「同和对策事業特別措置法」の学部長および大学院院長は、「同和对策事業特別措置法」の統合改正に関する要請書」を内閣府に提出した。このため、三月十八日開催の学部長会議の決

借地非訟事件手続とその問題

42

多角的視野に立つて

音読し且學生や音読聲を自ら課題にしようとしている学生

キャンパス情報

